

高校生掘り起こした核の被災

ビキニ被曝 聞き取り・訴訟までの経緯紹介

米国によるビキニ水爆実験の被災者調査など、約40年前から核や被曝の問題に取り組んできた「幡多高校生ゼミナール」の活動を伝える本が、昨年末に出版された。2021年1月に発効した核兵器禁止条約が後押しした。その活動は水爆実験から70年近く経った今も、東京と高知で続いている元漁船員や遺族が国などを相手取った裁判で触れられ、語り継がれている。



知の漁船員たちは同じ洋上で被曝しながら、風評被害や偏見を恐れて口を閉ざしていた。

「幡多ゼミ」40年の歩み本に

1954年3月1日、太平洋のビキニ環礁で米国が実施した水爆実験で、静岡県焼津港のマグロ漁船「第一五福竜丸」が被曝した。高

85年、長崎に投下された原爆により被曝した若者がビキニでも被曝し、自死していたと聞いた。

この活動は、90年にドキュメンタリー映画「ビキニの海は忘れない」になっ



出版された「写真記録 核被災に向き合う高校生たち」。本の帯には、俳優の吉永小百合さんが推薦文を寄せた

た。その後も現役の高校生は卒業で入れ替わりながら、朝鮮人強制連行・強制労働の調査などに取り組み、2011年に原発事故が起きた福島の高校生とも交流した。新型コロナウイルスの感染拡大で、この数年は活動を休止している。

20年7月、元漁船員や遺族が国に損失補償を求めたビキニ訴訟の原告団長、下本節子さん(72)が高知地裁で意見陳述をした。「父は30歳の時、第7大丸に乗って被曝しました。被害を明らかにしてくれたのは幡多ゼミナールの高校生や先生たちです」

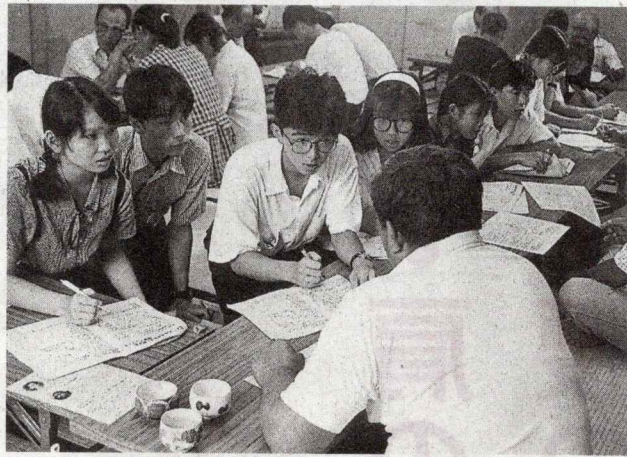
「水爆実験の被害者は他にもいるのではないか」89年までの5年間、ビキニ周辺で被曝した県内のマグロ漁船員を訪ねた。教員たちが漁船員を探し、生徒たちが話を聞きに行った。30年の時を経て訪ねてきた高校生たちに、漁船員は体験を語ったのだ。

今回出版した本は、「写真記録 核被災に向き合う高校生たち」(168頁、すいれん舎)。

60歳の頃から胃がんや胆管がんをわずらった父から、被曝体験を聞いたことはない。山下さんと高校生は下本さんの父からも話を聞いていた。

88年に宿毛工業高校1年生だった小川裕代さん(50)は、長崎とビキニで被曝し、自死した漁船員の母親に会って話を聞いた。「教科書でしか知らなかった原爆やアメリカの核実験のことが自分の足元に迫ってきた、疑問や怒りがこみ上げられた」

「被災者は被曝を必死で隠していたと思う。地元の子や孫に被害が出る不安もあったはず。実の娘ですら聞けなかったことを、高校生たちが聞き出した。すごいと思う」



①高知県室戸市で元マグロ漁船員の話を書く幡多ゼミ生たち=1986年8月、奈路広さん撮影(すいれん舎提供) ②私費で建てた「幡多地域文化ゼミナール館」で資料の説明をする山下正寿さん(右)=高知県宿毛市山奈町芳奈

幡多ゼミを先導した顧問教員の山下正寿さん(78)は「高校生や教員があれだけ頑張ったのだから、きちんと残したいという気持ちがあった」と話している。

元漁船員らが国などを訴えたいと話す。A4変型判、税込み1万6500円。図書館や学校へ納入し、若者に読んでもらうことを想定している。米・ハーバード大学などから注文が入っているという。問い合わせは、すいれん舎(03・52599・60)。(蜷川大介)